

(十一) 開拓

女房が木を切っている。

あまり上手な手つきではない。

ろくに構えもせず ツイとしゃがんで鋸(のこぎり)を当てるので、鋸が地面と水平でない。そのうち鋸を持つ手の角度が変わってしまうと、鋸の歯の面はねじれて木にくいこみ、ニッチもサッチも動かなくなる。

ため息をつき、女房は手を代えた。今までは左手で切っていたのである。

しかし利(き)き腕の右手でも、一度ねじれた面を、しかも体の左側で切るのは容易ではない。そこで女房は木の反対側に回って座りこみ、よく木を眺めてから慎重に地面と水平に刃を当てた。

今度はよく切れる。

小気味よくシュッシュッと音が立ち、手前から向こうからもおが屑が出、刃は順調に幹にのみこまれていく。

が、力がある。

11月の寒さの中で、暖まった女房は立ち上がって上着を脱いだ。ついでに一休みして、荒くなった息を整える。

傍らの山羊を見ると、ご機嫌でつる草をムシャムシャと食っている。もう平地の草は枯れかけているのだが、木に巻きついた葛(くず)だの木通(あけび)だの山芋だのの葉は青々として、山羊には嬉しいご馳走なのだ。初めての場所だと山羊は心細いのかたいていやかましく鳴くのだが、女房が傍にいれば安心するのだろう、おとなしい。

山羊を木につなぐのにはもうひとつ便利なことがあった。

ふだん草原に杭(くい)を打って山羊をつないでいると、日が暮れかけて家に帰りたくなる山羊は、グイ、グイ、と家に向かって鎖を引っ張る。繰り返すと杭はゆるみ、抜けてしまう。山羊は鎖をチャラチャラ、杭をゴンゴン、と盛大に音を立てて引きずりながら道を走って家まで帰る。それを見て犬も吠える。メエメエ、ワンワン、という声を聞いて女房はあわてて家から飛び出て山羊を檻へ押しこむ。気が

つかなかった日は、畑の大根の頭をみな齧（かじ）られてしまった。ひと冬の収穫がパーである。

それに懲（こ）りて翌日は、木製の大きな「かけや」を振り上げ、狙（ねら）いを定め、何度も杭の頭を叩くのだが、なかなか杭の芯に当たらない。杭はねじれ、深く土には埋まらず、あげく杭の頭はささくれる。亭主はやや骨細で、結婚このかた女房より体重が増えたことは半年しかないのだが、さすがに男だけに杭打ちが巧い。かけやを高く振り上げ、一呼吸おいては体重をかけて杭の芯を叩き、杭は順調に土中に沈んでいく。

「コツは左手だよ、マドちゃん。左手の小指を締めると、ぶれないよ」

剣道の竹刀と同じことを言う。

イヤイヤ、なかなかそう簡単にはいかない。

太めの女房は、自分より軽い亭主を見直した。

人が打ちこむ杭に比べ、根が生えている立木は強い。50 キロはあろうかという山羊の馬鹿力にも負けずに立っている。木の根の頑丈さがわかってみると、北海道だとかアメリカ西部だとかの開拓の苦労がしのばれる。根を掘りあげるのは容易なことではなかったろう。

「馬鹿」という漢字は馬と鹿をまちがえた故事からきているというが、その馬鹿力の持ち主がこの山の羊かよ、と女房は、後ろ足で立ち上がり、高いところのつる草の葉をムシャムシャと食っている山羊を眺める。

そういえば、いつぞや上の娘と正倉院展を見に行ったおり、奈良公園の鹿を見たとき、これは茶色い山羊だ、と女房は笑いが出た。鹿は焦げ茶で山羊は白いとはいえ、スゴクよく似ていたのだ。そのほかの違いは鹿のほうが足が細いことと、瞳である。

鹿の瞳はつぶらに丸い。山羊の瞳は横長の楕円である。女房を見ているようでも、焦点があっているのかどうか今ひとつわからない。たぶん肉食動物から逃げねばならない草食動物が、周囲の360度を見渡すためだろうが、細長い顔の両側についているから、正面からは両方の瞳が全部は見えない。どうにも妙な面構えである。

表情も、ほとんど変わらない。

ポーカーフェイス。

ただ、怒っている時は全身から怒りのオーラが出ている。これも女房と亭主にはわかるが、初めて山羊を見た人にはわからないだろう。飼い主にわかるのは、何度も怒った山羊に角で突き刺されているからである。

山羊の2本の角は前を向いていない。斜め後ろに伸びている。初めて見た時はこれで役にたつのか、といぶかったが、生やした張本「人」はちゃんと使い方を知っている。グイと頭を突っこんでおいて一瞬で斜めに頭を振り、角を引っ掛ける、その素早さときたらない。アッと思ったらもう、女房の太ももには20センチほどのみみずばれができて血がにじんでいる。亭主も何度か尻を突き刺された。

困るのは怒りの原因がわからないことである。どうも単に機嫌が悪い時に八つ当たりをされているのではないか。

血が出て痛いのはかなわない。

山羊を売ってくれた農家で、「やられたら必ずやり返しなさいよ。飼い主が誰か、どっちが偉いか教えんと。水をぶっかけるとか、棒で叩くとかせん（しない）と、山羊は調子にのってまたやるからね」と教わった通り、角で突かれた時は女房、山羊の角を両手でつかみ、腰を落として両足を踏ん張り、山羊と押し相撲をする。

しかし山羊は、動きを封じられただけでは負けたと思わない。

しばらくしてもうよかろうと女房が角を放すと、山羊はよけい怒ってすぐにまた頭突きをドシンとくわらせ、角を引っ掛けにくる。ベストなのは、人間が全身の力で山羊をねじ伏せることである。地面にまで座りこませると、山羊もさすがに負けたと思うらしく、もうかかつてはこない。

女房は肩で息をして、座りこんだ山羊を睨（にら）みつける。

山羊飼いや楽ではない。

女房が今切りかけている木は、一度は宅地として整備された土地に生えて大きくなった雑木（ぞうき）である。20年間一度も人の手が入らなければ、雑木の中でも大きいものは幹の直径が20センチを超える。高さも2階の屋根まで届く。隣の家

の中は暗い。

新興団地の住人は、今を去ること十数年前、引っ越してきた家族が全部で 20 軒ほどになったところで自治会をつくった。会費を集めて草刈り機を買いこみ、金属缶の容器を持って、ガソリンと車のオイルの混合燃料をガソリンスタンドまで買いに行き、月に二度草を刈り、後でビールを一緒に飲んだ。その後十数年たって家は増え、畑も増え、空き地はかなり減った。それでもビッシリと篠竹（しのだけ）が密生したところは、草刈り機の刃が鈍る。

手に負えない。

それがどうしたものか、この年はある北向きの 2 区画で、その篠竹が一斉に枯れた。花が咲いたようでもなかったが、根が張りすぎたか。試しに枯れた竹を女房が蹴飛ばしてみると、乾いた音を立てて折れた。

「今年ならこのジャングルを楽にきれいにできる」

女房は決心した。

毎朝山羊を連れ、両手で使う剪定鋏（せんていばさみ）を持って、女房は空地までやってくる。山羊をつなぐと、女房はまず枯れ竹を丹念に蹴飛ばし踏みつけて、少し空間をつくる。常緑樹の葉は山羊がモシャモシャ食う。すごい勢いである。そういえば、羊と山羊との違いは、羊が草専門なのに比べ、山羊は木の葉も好きだという話だった。親戚筋の鹿が植林したての若木の芽を食べて困るという話がよくわかる。

女房は葉がなくなった若木を剪定鋏でチョキンと低く切る。棘（とげ）だらけで背丈を超す猿捕茨（さるとりいばら）も、山羊が葉を食べた後、棘に気をつけながら女房は根元から切り取る。木通（あけび）や山芋のつるも切る。名前のわからない黄色い愛らしい花をつけるつる草を根元から切ると、根の芯が鮮やかに黄色い。妙な代物だ。

それから、遥か高くまで樹に巻いついたつるを引っ張って切り落とす。時には体重をかけて引っ張ると、枝まで折れてドサリと落ちる。しかし他のつる草に支えられて、どうしても落ちてこない時もある。これはまたあくる日だ。

毎日少しずつ空間が広がる。

翌年もこの空地を山羊の食糧源にすることを考えると、山羊を鎖でつなぐための木を多少残しておいたほうがいい。が、木を残しすぎると、山羊が歩き回るたびに鎖がからまり、山羊の行動半径が狭まるから、木と木の間が2メートルくらいは離れているほうがいい。

女房は梢を見上げ、周りを見渡し、要らない木を決めて鋸（のこぎり）で切る。木を切り倒すという作業には、女房、妙な快感がある。ふだんからきれい好きなわけではなく、家の中の掃除は長いことしていないのだが。

女房は止まらなくなった。

どっちみち他人様の土地である。隣の家の人に頼まれたわけでもない。

何を毎日汗をかいて働いている？

隠れた理由に、女房はまだ気がついていない。

毎日無償奉仕で働いたあげく、とうとう女房は山羊と二人三脚ならぬ一人・一匹六脚で、2区画120坪ほどの下草と低木をみな片づけ、風通しのいい林にしてしまった。「この向こうに家があったのか。今までは鬱蒼（うっそう）と茂った木とつる草で完全に隠れていたのに」と亭主が驚くほど見通しがいい。

今度は3筋離れた南側の2区画のジャングルだ。片手で握りこむ花切り鋏か両手用の剪定鋏、それに鋸の重装備で女房は山羊の鎖を引いて毎朝出勤する。

こっちの林には鳥が運んできた実生（みしょう）の南天（なんてん）が多い。南天は毒だから食わずな、と聞く。が、女房が油断している間に食べてしまったのに、山羊は腹をこわした様子でもなかった。

南天は箸の材料にするではないか。赤飯の上に飾りに置くこともある。南天が毒だと言うのは典型的な迷信だろう。

ホントの毒ならもっとひどいことになっている。

少し前、冬が来て青草がなくなった時、女房は家の裏手の、造園屋さんが刈った

庭木の枝をうず高く積みあげた土地へ山羊を連れて行ったことがある。山羊は常緑樹の葉を少し食べ、止めた。女房はせっかくのいい思いつきに従わない山羊に腹を立て、なおも枝に近寄らせてもう少し食べさせた。

が、翌日。

山羊が吐いている。

今まで見たこともない下痢もしている。

小屋から出ようとしめない。

なんともいえない感じで立ち尽くし、動かない。

目つきはドロ～ン。

夜になっても、いつものように横になっていない。ただ妙な顔をして吐き続け、顎から緑のよだれを垂らし、立ちすくんでいる。

これはおかしい！

毒だ。

女房が食べさせたのが恐らく毒の葉である。

女房はマジであせった。

死ぬな、雪よ。

女房は凍える夜に外へ出て、立ち尽くす山羊の背を撫で、話しかけた。

「雪、ごめんね。毒を食べさせちゃったんだね。ごめん、あたしが悪かった。死なないうで、雪。死なないうで。生きて。雪」

山羊は何も言わず、横にもならず立ったまま動かない。罪悪感にかられた女房は、夜の中に死んでしまわないかと、深夜までさらに二度、暖かい家から出て山羊の雪を撫で、呼びかけた。

翌朝、幸い山羊はまだ生きていた。が、妙な顔で立ったままなのは変わらない。

生気が戻ったのは丸2日後だった。

女房も亭主も心底ホッと、それからは懲りて、訳のわからない木の葉を食べさ

せるのは止めにした。以前山羊を飼っていた人に聞くと、山の雑木で有毒なのはそんなにないが、庭木にはけっこうあるという。

夾竹桃（きょうちくとう）はダメだよ、と何人かが女房に言った。

「あれは毒。人を呪う時、丑三（うしみ）つ時に人形を釘で打ちつけるって言うだろ、そんな時釘がわりに夾竹桃の木を削って使うんだよ」と。オー、怨念がこもってる。

「それからね、馬酔木（あしび）もいけないよ。字の通り、もっと大きな馬が酔っぱらうくらいだから」。

女房は新知識をシッカリ頭にたたきこんだ。

空き地の中に、ずっと前に枯れた木が、倒れかけて斜めに隣の高木の枝の又にもたれ、つる草だらけになっている。歩き回るのにひどく邪魔である。女房はつる草をことごとく切り払って山羊に食べさせながら、その枯れ木を動かそうとしてみる。が、重くて無理だ。あれこれやってみた後で、これは「押してもダメなら引いてみな」だと女房は気がついた。傾いた幹の根っこに近いところを抱え上げて、後ろに下がるのである。隣の高木の枝別れから枯れ木は離れ、ドウと地面に倒れた。

快感。

12時のサイレンが鳴った。

女房はもう3時間も働いていることになる。

が、この気持ちいい作業を止めて家に帰る気にはなれない。家にいるのは、昼間から飲んだくれていたろう高齢の父親と、学校に行けなくなってしまった中学生の末娘。昼飯を食わせなければいけないのだが。

女房が世話をする責任があるのは、犬と山羊と猫だけではないのである。

1時を過ぎてさすがにくたびれ、山羊をおいて女房は帰った。話のはずまない昼飯の後は昼寝だ。

翌日は、女房の手首ほどの太さにまで育った葛（くず）のつるを鋸で切り離す。

これだけ葛が太ければ、根っこにはさぞかし葛粉の元になる「でんぷん」がたまっているのではないかと思うが、さすがの女房もそこまで手を出す気にはなれない。葛のつるは地を這い、木に登ること数メートルに渡る。女房の体重でもビクともしない丈夫さで、谷川にかける橋につるを使うというのがよくわかる。

この空き地には背の低い笹が茂っている。いよいよ冬になってくると、木の葉もつる草の葉も枯れ果て、落ち尽くして、もはや山羊の口に入るものは、地面の落ち葉か枯れ草、緑ならこの笹しかない。夏の間はロクに食べなかった硬い笹の葉を、冬になれば山羊は食べる。女房は山羊に笹の葉を食べさせた後、茎だけになった笹を剪定鋏で切って回ることにした。ずっと楽である。

空き地にはもう1本、立ち枯れてなお幹の模様から松とわかる木がある。直径は20センチを超えるだろう。

これを倒したいなあ。

両掌を当てて押してみる。

うん？

方向によってはわずかに動く。

よっしゃ、これならいけそー。

女房は幹の周りを歩き、違う方向から木を押すと、揺れる。

押す、揺れる、押す、揺れる、押す、揺れる。

オ、オ、オ、いくぞ、いくぞオ。

オー、倒れた！

地響きがズンと腹に響いた。

イヤイヤ、気持ちいい。

誰か目撃してなかったかしらん、この瞬間？

女房は切り倒した木と頑丈なつるを、隣人が草を刈り払った空き地に片っぱしから引っ張っていくことにした。3メートルからある木を引きずるのには、これまた結構な力がある。何カ月かたって乾いたら、燃やしてやろう。

女房と山羊は2カ月かけて、この2区画140坪ほども、風通しのいい林にしてしまった。

そして気がついてみると、娘は学校に行けるようになっていた。

女房はこの時初めて、どうして自分が開拓作業に情熱を傾けたのかを納得した。

不登校の娘を持つ親の心痛を晴らす場であったのだと。子どもが問題を抱えて前に進めなくなった時、親は手助けをするが、できることには限りがある。西洋の諺（ことわざ）にも「人は馬を水辺に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない」とあるように、親が子の手を引っ張って歩かせるわけにはいかない。座りこんでいた子ども自身が立ちあがって歩き出すまで、親は待つしかない。

開拓は、その辛抱しかない辛い時期を親が耐えるための作業だったのだ。

そして辛抱は実り、冬は去ったのであった。

山羊がいたおかげで、女房は空き地をきれいにしつつ心痛を和らげることができ、一石二鳥だったと言えるのかもしれない。

「山羊様さま」か。